

日本語構文と項省略順序の原則

成山重子
メルボルン大学
shigeko@unimelb.edu.au

要旨

日本語における多項構文構成と項省略順序の原則について提唱する。つまり、なぜ、「電話した」というと即釈は「私が誰かに電話した」のであり、「電話があった」というと「誰かから私に電話があった」になるかという説明である。

日本語には、主語は非主語項より名詞句階層（1人称＞2人称＞人間＞動物＞無生物）またはトピック（談話）性において高く（直列に）なるという制約がある。つまり、「私は太郎にあげた」【直列】はいいが「太郎は私にあげた」【逆列】は非文である（直列の基本原則）。また、この二つの制約において高い項から省略される省略順序の原則がある。つまり、「太郎にあげた」は自然だが、「私はあげた」というと省略された項が気になってしまう。この原則は、省略された項の対象（人）物を把握する文法規則であり、また日本語らしさの表現を司る一つの鍵である。

1 はじめに

この論文は日本語における二つの言語事象を解明し、その原則を提唱する。一つは多項構文構成についてである。英語では、概して対象（人）物の如何に関わらずどれを主語にしても非文にはならない。例えば、Taroを主語にした文でも'Taro gave it to me'、話者を主語にした文でも'I gave it to Taro' 非文にはならない。しかし、日本語においては制約があり、「私は太郎にあげた」はいいが「太郎は私にあげた」は非文である。日本語では無生物は主語になりにくいという制限は周知の通りよく言われていることだが、この論文はそれを総括的に捕える事を目的とし、二節で述べる。

もう一つの言語事象は項省略についてである。日本語では主語や目的語などの項が頻繁に省略される。しかしながら、どのような原則に基づいて省略され、また省略された項の対象（人）物を把握するのは、議論されてきてはいるが（例、久野 1978）、断面を捕えたものが多く、今だ全体像を明らかにしたものはないといっている。この論文は項省略順序の原則について提唱し三節で示す。

2 直列の基本原則

日本語には多項構文を構成するにあたり、次の基本原則があると考えられる。

直列の基本原則： 主語は非主語項より名詞句階層またはトピック（談話）性において直列に（高く）なるという制約がある。

この直列の基本原則を満たす二つの制約、名詞句階層とトピック性を中心に、以下の小節でこの原則を説明する。

2.1 名詞句階層制約

名詞句階層とは、Silverstein(1976)が能格性を示すために提唱したもので、図1に示されている。その後、この階層にはいろいろな傾向（動作者、トピック性、等）があることも提唱されている。

図1 Silversteinの名詞句階層 (Silverstein 1976の簡略、cf. 角田1991)

1人称＞2人称＞	人間＞動物＞無生物
代名詞	名詞

直列構文とは、主語が非主語項より名詞句階層において高い（つまり左にある）ことであり（例えば、1人称の主語と3人称の非主語 [1->3]）、逆に低い場合には逆列構文になる。この逆列構文が非文を作る原因になることが多い。つまり、これにより下記の非文*(b)文を説明することができる。

- (1a) 【直列: 1->3】 私は太郎にあげた。
- (1b) 【逆列: 3->1】 *太郎は私にあげた。
- (2a) 【直列: 1->2】 私はあなたに電話した。
- (2b) 【逆列: 2->1】 *あなたは私に電話した。
- (3a) 【直列: 1->3】 私は太郎を手伝った。
- (3b) 【逆列: 3->1】 *太郎は私を手伝った。

- (4a) [直列: 1->3] 私は太郎をみつけた。
 (4b) [逆列: 3->1] (*)太郎は私をみつけた。
 (5a) [逆列: 動物->無生物] ねこが車にぶつかった。
 (5b) [逆列: 無生物->動物] (*)車がねこをひいた。

(2b)や(3b)は非文と思えない話者もいるかもしれない。また、(4b)や(5b)は全くの非文ともいえない。これについては、2.3節で述べる。ここでの問題は、逆列からくる非文の内容はどのような構文を使って伝えられるのかということである。それには主に四つの構文が使われる。一つは、構文は逆列のままだが、くる／くれる(逆列動詞と呼ぶことにする)を伴い逆列であることが明示される。例えば、

- (1c) [逆列] 太郎は私にくれた。
 (2c) [逆列] あなたは私に電話してきた／くれた。
 (3c) [逆列] 太郎は私を手伝ってくれた。

二つ目は、構文をかえ直列表現になる。

- (3d) [直列] 私は太郎に手伝ってもらった。(反意動詞を使う)
 (4d) [直列] 私は太郎にみつかった。(自動詞にする)
 (5d) [直列] ねこが車にひかれた。(受身形にする)

三つ目は、主にサ変動詞(報告する、招待する、等)の場合で、サ変動詞を名詞化して主語にすることである。例えば、非文(2b)は(2e)のように表現される。

- (2e) 私に太郎から電話があった。

つまり、この場合には「XにYからZ(サ変動詞の名詞)がある。」の構文になり、名詞句階層上では、 $X > Y > Z$ になる。この場合、直列の基本原則に反して、主語(Z)は非主語項(XとY)より名詞句階層またはトピック性において逆列に(低く)なってしまうので、これに関する処置は今後の課題である。ここでは、XとYを項とみるか考慮されるべきである。また、二つ目と三つ目の方法は、対応する直列文より「他動詞性」が低くなることも考慮のポイントになる。

四つ目は、構文を全くかえることである。例えば、(6a)のような非文は、(6b)のように表わされる方が自然で、これは複文になっている。

- (6a) [逆列] *コーヒーは太郎をさわやかにした。
 (6b) [直列] 太郎はコーヒーを飲んでさわやかになった。

2.2 談話制約

直列の基本原則にはもう一つの制約、トピック(談話)性があり、これにおいても直列に(高く)なるという制約がある。トピック性とは、トピックはもちろんのこと、限定度(definiteness)や旧情報(照応性、referentiality)も含まれ、名詞句階層にも関連する制約である。この制約は特に複数の項が名詞句階層上において同じ、例えば二つの人間名詞などの場合には、名詞句階層は無効になってしまうが、トピック性(トピックになりやすさ)により人間名詞には、「親族／固有名詞 > 人間名詞」の階層がみられる。例えば、「太郎」と「泥棒」という二つの項があった場合、前者は固有名詞で後者は一般人間名詞であるので、前者の方が後者より、トピック性が高くなる。そこで、(7b) [逆列] は全く非文ではないが、(7a) [直列]の方がより自然になる。実際の談話の中では、(7b) [逆列]のような文は「泥棒」が強調(focus, 次の2.3.3節参照)されている時以外は出現しない。

- (7a) [直列] ついに太郎が泥棒をみつけた。
 (7b) [逆列] (*)ついに泥棒が太郎にみつかった。

もちろん、「泥棒」がトピックであったり(7c)、指示詞がついている(つまり、旧情報)(7d)場合には、トピック性が高くなるため、それを主語にしたほうが自然な文になる。

- (7c) ついに泥棒は太郎にみつかった。
 (7d) ついにその泥棒が(／は)太郎にみつかった。

2.3 例外

直列の基本原則があてはまらない例が四つある。従属節と視点、動詞のタイプ、focus、そして逆列の度合で、以下に述べる。

2.3.1 従属節と視点

従属節では、すでにみた非文が非文でなくなる。

(2f) [逆列] あなたが私に電話したのは、理由があったんでしょう。

(3f) [逆列] 太郎が私を手伝ったのは、下心があったからだ。

(4f) [逆列] 太郎が私をみつけたのは、昨日だった。

ただし、「あげる」「くれる」はこの限りでない。

(1f) [逆列] *太郎は私にあげたのは、...

ただし、話者以外の人に視点が置かれれば、この限りでない。

(1g) [逆列] 太郎は私にあげたかったに違いない。

2.3.2 動詞のタイプ

動詞によって、逆列が非文にならないものがある。特に非難／被害者意識が伴う文(例(8), また(2b))が非文でない時は非難の意味合いが強くなることが多い)で、使役(例(9))もよく使われるが、必ずしもそうでない場合もある(例(10))。

(8) 太郎が私をぶった。

(9) 誰が私をそうさせた。

(10) 太郎が私に言った／を呼んだ。

2.3.3 Focus

ある項を取り立てて言う場合(focus)は、直列の基本原則があてはまらない。例えば、非文(7b)は、Wh-question「誰が太郎にみつかったの」の回答としてや、「泥棒が太郎にみつかった」ので「太郎が泥棒にみつかった」のではないと強調を表すときは非文とはいえない。

2.3.4 逆列の度合

名詞句階層上の差が小さい時や階層の下方(例えば(5b))では、逆列でもそれほど違和感がない。

(5b) [逆列: 無生物→動物] (*) 車がねこをひいた。

無生物でも、車のように動きを伴ったり、台風のように他に影響を及ぼしたり、パトカーのように警官の代名詞的に使われたりする場合は、名詞句階層上高く扱われるようだ(角田1991)。

3 項省略順序の原則

次に、二つ目の言語事象、項省略について考える。まず、下記の原則を提唱する。

項省略順序の原則: 名詞句階層またはトピック性において高い項から省略される。

最初に、今までみた例文を使い、どの項が省略されやすい(括弧で示す)かみることにする。ただし、主語の場合、が格がついているものは、新情報や強調を表すため省略できない(久野 1973:50)。そこで、以下にみる例文の主語は全て「は」を伴っている。

(11a) (私は) 太郎に本をあげた。

(11b) ?私は (太郎に) 本をあげた。

(11c) ?私は太郎に (本を) あげた。

(12a) (私は) あなたに電話した。

(12b) ?私は (あなたに) 電話した。

(13a) (私は) 太郎を手伝った。

(13b) ?私は (太郎を) 手伝った。

(14a) (私は) 太郎をみつけた。

(14b) ?私は (太郎を) みつけた。

(15a) (男は) 田中にみつかった。

(15b) ?男は (田中に) みつかった。

一貫して、(a)文の主語を省略した文は省略が気にならないが、主語を残し非主語を省略すると、質問の返答時以外は、何か情報が欠けているようにきこえる。例えば、「太郎にあげた」はいいが、「私はあげた」というと何を／誰にあげたか定かでない。つまり、名詞句階層またはトピック性において低い項を省略して高い項を残すと非文になる。これは、(11)文の複数の項の省略を観察するとより顕著である。

(11a) (私は太郎に) 本をあげた。

(11b) ?私は(太郎に本を)あげた。

3.1 省略項の直列の解釈

(4b)の逆列構文「太郎は私をみつけた。」は、非文と必ずしもいえないという人もいるかもしれない。しかし、項が省略された場合には、直列の解釈になる。つまり、「みつけた」という項省略文では(非質問文において)は「太郎は私をみつけた」の解釈にはなれない。

3.2 頻度の高い主語省略

主語は省略されやすいという言語事象は暗黙の了解のような存在だが、二つの言語事象(構文と項省略)を司る二つの原則から、これを説明することができる。すなわち、主語は非主語項より名詞句階層またはトピック性において直列に(高く)なること、また、名詞句階層またはトピック性において高い項から省略されるという制約から、主語の省略が多いと推定できる。これは(小規模であるが)調査結果に現われている。月間PHP雑誌の8記事を分析した結果、216名詞句が省略されていた。その内訳は以下の通りである。

主語省略	[(主語) 非主語 動詞]	93.5%
非主語省略		6.5%
内、主語省略を伴う	[(主語) (非主語) 動詞]	4.6%
主語省略を伴わない	[主語 (非主語) 動詞]	1.9%
計		100.0%

つまり、文は名詞句階層またはトピック性において高い項を主語にして構成され、それからその主語から省略される事がわかる。主語省略を伴わない例はわずか1.9%で、2.3.3節でみたfocusが主要要因である。

4 おわりに

注目すべき点は、二つの基本とも言うべき言語事象を司る二つの原則、「直列の基本原則」と「項省略順序の原則」は深い相関関係をもっていることである。つまり、名詞句階層値とトピック性という関連する二つの制約により各名詞句の名詞性が決まり、構文構成はその名詞性によって決まることである。例えば、先の例(2a)は直列文で、(2e)は逆列の意味が直列構文で表わされた文である。

- (2a) [直列] 私は太郎に電話をした。
(2e) [逆列の意] 私に太郎から電話があった。

従って、項が省略されても、この意味の違いは構文構成から把握することができるのである。

- (2a)' [直列] 電話をした。
(2e)' 電話があった。

(2a)'の構文では太郎が私に電話したという意味にはとれない。同様に(2e)'では、私が太郎に電話したという意味にはとれない。それは前者は電話人が受取人より名詞性の値が高い構文であり、後者は逆だからである。

これら二つの原則は取りも直さず、省略された項の対象(人)物を把握する文法規則であり、また日本語らしさの表現を司る一つの鍵である。

参考文献

- 久野すすむ(1978). 談話の文法. 大修館書店
Nariyama, S. (2000). Referent identification for ellipted arguments in Japanese. PhD Dissertation: University of Melbourne
Silverstein, M. (1976). Hierarchy of features and ergativity. In R. Dixon (ed.). Grammatical categories in Australian languages. Australian Institute of Aboriginal studies. Canberra 112-7
角田太作(1991). 世界の言語と日本語. くろしお出版